

18～20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会構造

著者	岸上 伸啓
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	34
ページ	39-50
発行年	2002-12-20
URL	http://doi.org/10.15021/00001985

18~20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会構造

岸上 伸啓

国立民族学博物館先端民族学研究部

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1 はじめに | 2.7 シベリア・エスキモーのクラン |
| 2 シベリア・エスキモーの社会構造について | 3 ベーリング海峡地域における交易とその諸影響 |
| 2.1 シベリア・エスキモーの概略 | 3.1 ベーリング海峡交易 |
| 2.2 家族組織 | 3.2 捕鯨船との交易 |
| 2.3 結婚に伴う居住様式 | 4 交易におけるシベリア・エスキモーの役割とその変化 |
| 2.4 親族集団 | 5 結論 |
| 2.5 長の継承方法 | |
| 2.6 動産の相続と階層化 | |

1 はじめに

チュコトカ半島から、アラスカ、カナダ、グリーンランドにかけての極北沿岸地域に住む人々は、狩猟・漁撈民であると考えられ、相対的に単純な社会組織と技術を保持する人々と考えられてきた。

ところが、19世紀以前にはベーリング海峡地域に住む先住民の中にはクラン組織をもつグループが存在していたことが知られている。クループニクは、シベリア・エスキモーの海獣狩猟は、チュクチのトナカイ遊牧に比べて150倍から500倍近く生業効率が高いことを指摘している (Krupnik 1993: 125-126)。もしこのように狩猟・漁撈民であっても生産力が高くかつ安定しているならば、より複雑な社会組織を有していても驚くことではない。しかし、ベーリング海域のエスキモーの生業効率が、他の地域のエスキモーよりもはるかに高いという見解は管見によれば知られていない。さらにクループニクによる海獣狩猟の生業効率の算出方法に問題がある可能性が高い (佐々木 1999: 533)。

本稿では、18世紀から20世紀にかけてのシベリア・エスキモーの社会構造と交易活動について報告し、クラン組織の再生産と衰退を説明する仮説を提起する。筆者は、クループニクが指摘する生産性の高い生業形態のみに着目するのではなく、それ以外の要因がクラン組織の出現と衰退、消滅に深く関係していることを指摘したい。

2 シベリア・エスキモーの社会構造について

2.1 シベリア・エスキモーの概略

シベリア・エスキモーは、チュコトカ半島のベーリング海峡に面する沿岸からその近海の島々を主な生活領域としてきた。彼らは、ウミアク（大型皮製舟）を利用したクジラやセイウチなどの大型海獣猟やアザラシ猟およびサケ、マスの漁撈を生業の中心としてきた。彼らの自称はユピギート（Yupigyt）である。1931年から1938年まではソ連政府は彼らの公称をユイト（Yuit）としたが、1938年からエスキモー（Eskimo）に名称を変更した（Wixman 1984: 64）。

シベリア・エスキモーはチュクチやロシア人と混血し、チュクチ化したり、チュクチ語やロシア語を話すようになってきている。彼らの総人口は1800年代の終わりには約1300名（Krupnik 1993: 29）、1926年には1293名、1959年に1118名、1970年には1308名、そして1979年には1510名である（Wixman 1984: 64）。

シベリア・エスキモーの社会構造に関しては詳細な研究は行なわれておらず、不明な点が多い。以下では、メノフシシコフ（Menovshchikov 1964）とハジ（Hughes 1958, 1984 a, b, c）の研究に従って、その社会構造について整理してみたい¹⁾。

2.2 家族組織

世帯構成に関しては、明確な情報は無いが、ポート組がクランをもとに構成されていることなどから、世帯が核家族から構成されていても、社会・経済的な単位は、父系大家族集団であると推定しうる。19世紀の半ばまでは半地下式の冬の家が使用されており、数家族が同居していた。その住居は19世紀の半ばころにチュクチ式の冬テントに取って代われ、1950年頃まで使用された（Hughes 1984b: 251）。

2.3 結婚に伴う居住様式

同一の父系クランに属する者同士は結婚することが許されず、クラン外婚であった。結婚は父方居住婚が規範であった（Menovshchikov 1964: 843）。しかししばらくの間、男性は花嫁の両親に労働奉仕をした後で、父方居住をすることがあった（Menovshchikov 1964: 843）。また一夫多妻婚もみられたが、これは裕福な男性のみが実践できた（Hughes 1984b: 255）。

2.4 親族集団

20世紀の初頭には、親族の出自は父系であり、クランが存在していた（Feinberg 1967; Hughes 1958, 1984a, b; Menovshchikov 1964: 843）。このクランは系族の可能性もある。1つの村は1つもしくは複数のクラン集団から構成されており、村の中にそれぞれのクラ

ンが特定の居住場所を占めていた (Hughes 1984b: 254)。チュコトカ半島のシレニキやチャプリノには、クラン名や固定化した名字が存在していた。

捕鯨に使われる大型ボートの乗り組員は、チュクチの場合と同じく、ほとんどの場合が大型ボートの所有者の兄弟、息子やおいなど近親族のものであった。このボート組を中心とした親族集団がかつては居住の単位であったが、19世紀の終わりには別々に住んでおり、狩猟の時のみに共同で行動していた (Menovshchikov 1964: 843)。1930年代の半ばまでは、このボート組はクランに基づいていたが (Hughes 1984b: 254)、その後は衰退の一途をたどった。

2.5 長の継承方法

村が1つのクランで構成されている時には、クランの長老が村の長となり、複数のクランから構成されていた場合は、最も勢力があり尊敬されているクランの長老が村全体の長となることがおおかった。長の継承は父系であった (Hughes 1984b: 254)。

しかしアメリカ人とクジラのヒゲ (baleen) やセイウチの牙、毛皮を交易するようになると、エスキモーの中で大型ボートの所有者や交易の仲介者が、経済力を持つようになり、「その土地の支配者たち」と呼ばれるようになった。彼らは狩猟の時期の開始と終わりをきめるなど村人の社会経済生活を統率するようになったという。この交易の影響のもとで新しい村長が出現したが、この村長の役割は、通常、父から息子へと父系の線に沿って継承された (Menovshchikov 1964: 845)。

2.6 動産の相続と階層化

財産の相続は父系相続が行なわれていた (Menovshchikov 1964: 843)。もともとクラン間の経済的な差異や大型ボート所有者とそれ以外のクラン成員の間には経済的な差異があったことは事実である。大型ボートの所有者には獲物の良い部分を取る権利があり、その他の人々と比べて経済上の不平等が出現する基盤はあった (Menovshchikov 1964: 843)。しかし、捕獲された大型獣を分配する制度などによってその分化はあまり顕在化しなかった。

2.7 シベリア・エスキモーのクラン

シベリア・エスキモーの社会構造で、他の地域のエスキモー (イヌイットとユツピック) と異なる点は、彼らがクランの制度を持っていたことである。また、アラスカのユツピック・エスキモーとはカシム (Kashim) と呼ばれる「共同の男性の家」を持っていない点が異なる。ハジによると、シベリア・エスキモーやセント・ローレンス島の親族集団は、マドックの「クラン」に相当すると言う (Murdock 1949: 97)。クランであるためには「単系の出自規則に基づいて、成員の中核的な核 [= 世帯主] が結ばれていなくてはなら

ない。—中略—その集団が居住的な統一をもたなくてはならない。—中略—社会的な統合を現実に示さなくてはならない」(マードック 1978: 98-97) という3つの要件を満たしていなければならない。

シベリア・エスキモーのクランは生活の多くの局面に影響を及ぼしていた。ハジは次のように要約している。婚姻パタン(クラン外婚)、狩猟集団(狩猟ボートの乗組員はクランの成員から構成)、居住パタン(特定のクランのメンバーが村の一面に集住)、埋葬パタン(シベリアでは特定の場所にクランの人々が埋葬される)、宗教活動(特定のクランが独自の儀礼を持つ)、フォークロア(起源やグループ間関係についての説話を持つ)、特定の下位方言などをクランの成員は共有していた(Hughes 1984a: 244)。

3 ベーリング海峡地域における交易とその諸影響

3.1 ベーリング海峡交易

欧米人と接触する以前からアラスカの沿岸部に住む先住民は、交易ネットワークを利用して、旧大陸の先住民、新大陸の内陸部の先住民たちからいろいろな物品を入手していたことが知られている(Bogoras 1904-09: 53-58; Michael 1967: 100-101; Ray 1975: 97-98; Vanstone 1979: 63-64, 88-89; Hickey 1979: 420-421; Pierce 1980: 30-31)。このベーリング海峡交易は15世紀ころまでには形成されていたと考えられている(Hickey 1979: 411, 430)。

17世紀の中頃までには、ロシア人はシベリア北東部まで進出したため、ヨーロッパ製品がチュクチやシベリア側のシベリア・エスキモーの手に渡るようになった。それらの製品はさらにダイオミード島やスワード半島の村々を経てアラスカの先住民社会へ伝わっていった。18世紀の初めにはスレッジ島民、ダイオミード島民、ケーブ・プリンス・オブ・ウェールズの先住民が新旧大陸間交易の仲介者として活躍していた。そして現在のコツビュー村の近くにあるホサム・インレット(Hotham Inlet)がアラスカ地域における交易のセンターのひとつになった(Vanstone 1984: 154)。

この交易で重要な役割を果たしたのは、シベリア側ではチュクチとシベリア・エスキモーであった。チュクチは内陸部でトナカイ遊牧を行うトナカイチュクチと海岸部で海獣狩猟や漁労を生業とする海岸チュクチの2つのグループに大別できる。彼らはほかの東北アジアのグループとは異なり、1700年代からロシア帝国(コサック兵)の侵略に抵抗し続けて来た(フォーシス 1998: 163-168)。しかしチュクチは、鉄製品と火器の入手などロシア人との交易で得られる物質的利益に気づき、1764年以降ロシア人と接触を始め、人質をとらない条件で、いくつかのグループは進んで毛皮税を支払った(フォーシス 1998: 169)。そして1788年にロシアとチュクチは和平条約を締結し、1789年にコリマ河沿いに交易のためのアヌイ交易所がロシアのヤクーツク当局によって築かれた。1789年よりアヌ

イ交易所で年に一度、交易市場が開設されるようになった (Bogoras 1904-09: 700-705)。このアヌイでの交易はチュクチに対してヨーロッパからの物品の供給を大きく増大させた一方で、チュクチだけでは供給しきれない毛皮の巨大な需要を生み出した。チュクチはこの需要に対処するべく、シベリア・エスキモーやアラスカの先住民との接触を拡大させ、その結果として大陸間の交易ネットワークが急速に展開したのであった (Burch 1988: 234)。このことが大きな刺激となり、ベーリング海峡交易はさらに活発になり、コツビュー湾から北はポイント・バローにまで及ぶ沿岸部の既存の交易関係を強化し、促進させたと考えられている (Ray, D. 1983: 83)。

このためにこの交易によってチュクチやシベリア・エスキモー、アラスカのイヌピアック・エスキモーの仲介者を経て新大陸に入っていくロシア製品の量が大幅に増加した。19世紀の前半にベーリング海峡交易はピークに達し、ロシア人、仲介者としてのチュクチやシベリア・エスキモー、アラスカ先住民という交易のネットワークが作動していた (Burch 1988: 234-235)。シベリア・エスキモーの役割は、アラスカ・エスキモーとの交易においては海岸チュクチの役割よりもはるかに大きかった²⁾。彼らは20世紀初頭まで、セント・ローレンス島へ、そしてアラスカへと交易の旅を行っていた (Hughes 1964: 9)。

ロシア側からアラスカ側へと入ってくる主な交易品はタバコ、ビーズ、金属製ボタン、たん茶、装飾品、ナイフ、銚頭、針、鍋、やかん、はさみなどの金属製品であった (Burch 1988: 235-236; Morrison 1991: 242)。タバコは初期にはとるにたらない交易品であったが、1810年頃までには最も重要なものとなっていた (D. Ray 1975; Burch 1988: 235)。一方、アラスカからチュコトカ半島の方へ流れていった交易品は、テン、ビーバー、ホッキョクキツネ、ジャコウネズミ、カワウソ、ヤマネコ、アナグマ、アザラシの毛皮、海獣の油、セイウチの牙、木彫品、クジラのヒゲなどであった (Burch 1988: 235; Morrison 1991: 242)。この交易のネットワークを通して、新旧両大陸の先住民の間でそれぞれの地域の資源や産物も交換された。アラスカへはチュクチのトナカイの毛皮が、チュコトカ半島へは弓矢などを作るもとなる木材材料、仮面、パイプ、椀、人形、衣類が交易された (Burch 1988: 235)。

1867年にアラスカがアメリカ領になってからもアラスカのイヌピアック・エスキモーとシベリア・エスキモーやチュクチとの交易は続いたが、それは彼らにとって実質的には生活必需品の交換というよりも贅沢品の交換、そして形式的な実質をとまなわない交易へと変貌した。衣類の素材となるシベリア産のまだら模様の柔らかいトナカイの毛皮 (spotted tame reindeer skin) が、アラスカから持ち込まれた品物と交換された (Ray, D. 1983: 89)。

1900年から1950年頃までの時期のベーリング海峡間の交流を研究しているシュワイツァーらは、交易品を次のように報告している (Schweitzer and Golvko 1995)。チュコトカ半島側からリトル・ダイオミード島やウエールズへ持ち込まれた品物は、ホッキョクキツ

ネ、トナカイ、アライグマ、クマ、アザラシなどの毛皮、セイウチの牙、皮革製ベルト、先住民の靴や手袋、タバコであった (Schweitzer and Golovko 1995: 113)。一方、アメリカ側からナウカンや他のチュクチの村へもたらされた品物は、アメリカ製のライフル、銃弾、小口径ライフル、セイウチの牙を細工するためのドリルなど道具類、食料 (ビスケット、茶、缶詰、菓子、果物、蜂蜜)、タバコ、酒類、アライグマの毛皮、ビーバーの毛皮、既製服などであった (Schweitzer and Golovko 1995: 112-113)。

チュコトカ半島の先住民は、ベーリング海峡交易に長い期間にわたり深く関わってきたために1920年代にシベリアがソ連領になり、ソ連政府によってベーリング海峡交易が禁止された時でも、アラスカ側からの交易品に対する需要は消えなかった (Schweitzer and Golovko 1995: 114)。1900年頃以降におけるこの交易の特徴は、チュコトカ半島の方からは原材料や先住民が作った品物がアラスカの方へ入り、アラスカ側からは欧米製の品物がチュコトカ半島側へ入っていたことである (Schweitzer and Golovko 1995: 114)。すなわち新旧大陸間における欧米製品の流れが、1900年頃を境に逆になった。そしてこの数世紀にわたって行われたベーリング海交易は米ソの冷戦の開始をもって幕を閉じた。

3.2 捕鯨船との交易

ベーリング海峡北域に多数のクジラ (Bowhead Whale や Pacific Right Whale) が生息していることが分ると、1850年頃からアメリカの捕鯨船が進出して来た (Bockstoe 1995)。アメリカ人は捕鯨に従事するかたわら、19世紀の後半にはチュコトカ半島やアラスカ北西部の沿岸で越冬し、海岸チュクチやシベリア・エスキモー、イヌビアク・エスキモーと交易を行った。ラム酒、火器、弾薬、鉄製ナイフ、斧、磁器、針、タバコ、衣類、小麦粉を、クジラのヒゲやセイウチの牙と交換していた。アメリカ人がもたらした交易品は、先住民の仲介者によってさらに他地域へと運ばれていった (Burch 1988: 236)。

フットによると、1848年から1885年にかけてアナディールからポイント・バローまでの海域で1万頭あまりのクジラが捕獲されたという。さらに1865年から1885年にかけて同地域では捕鯨者によって10万頭以上のセイウチが捕獲されたという (Foote 1964: 18)。1880年頃からベーリング海峡におけるクジラやセイウチが減少し始めたために、捕鯨者は先住民との毛皮交易に力を入れるようになった。この捕鯨者による交易は、鯨類がこの海域から姿を消した1900年代の初めまで続いた。

捕鯨者がこの地域に出現した直後、ハワイ諸島に基地を持つ小型交易船がアラスカに到来し、先住民と交易を行った³⁾。1851年の夏までに6隻の小型交易船がオーストラリア、ハワイ、ホンコンなどからベーリング海域に到来し、先住民と交易を行ったことが知られている (Bockstoe 1995: 182)。彼らは主に火器とラム酒、ウィスキーを、先住民がもたらすクジラのヒゲやセイウチの牙、各種毛皮と交易した (Burch 1988: 236)。例えば、1854年にホノルルから同地域へやって来たあるスクナー船は重量にしてセイウチの牙1.8ト

ンあまり、クジラのヒゲ1.4トンあまり、そしてテンやイタチの皮200ないし300枚を母港へ持ち帰った(Bockstoce 1995: 184)⁴⁾。捕鯨者や交易者がもたらしたラム酒は、新旧両大陸のベーリング海域の先住民社会における紛争の原因となった(Bockstoce 1995: 188-191)。

4 交易におけるシベリア・エスキモーの役割とその変化

チュコトカ半島沿岸部のシベリア・エスキモーと海岸チュクチは、シベリア側とアラスカ側の交易の仲介者であった。また、近年の研究によって、セント・ローレンス島、リトル・ダイオミード島、キング島のエスキモーもまた、仲介交易者として活躍していたことがわかってきた(Kingston 2000)。

1649年にチュコトカ半島のアナデルにロシア人によって砦が築かれて以降、ロシアの金属製品がチュクチのトナカイ皮とともに交易品としてアラスカ側に流通し始めた(Rainey 1947: 267-268)。1850年代初めまでシベリア・エスキモーや海岸チュクチは毎年、4, 5艘のウミアック(大型皮製舟)に乗ってアラスカ側を訪れていた(Oswalt 1967: 132)。そのひとつの航路は、イースト・ケープ(East Cape)、ダイオミード諸島(Diomed Islands)、そしてウエールズ(Wales)や後にはホサム・インレット(Hothom Inlet)であった。アラスカに運ばれた交易品はさらにアラスカの先住民のネットワークを通して広まっていった(Oswalt 1967: 132)。この仲介者としての役割は、1789年にアヌイ交易が開始され、ロシア人そしてその交易相手のトナカイ・チュクチがより多くの毛皮を求めるようになると、さらに強化された。シベリア側からの金属製品やトナカイ皮、ビーズ、タバコ、パイプなどの流入は、アラスカのポート・クラレンス(Port Clarence)やコツビュー湾(Kotzebue Sound)における先住民交易祭(native trade fairs)や交易パートナー関係の発達の直接的な要因となったと推定される(Burch 1970; Rubel 1961)。

さらに1850年代以降にアメリカの捕鯨船がチュコトカ半島を訪れるようになると、クジラのヒゲやセイウチの牙そして、後には毛皮を交易する仲介者として活躍した。これは、火器やラム酒を交易品としたハワイやサンフランシスコの小型の毛皮交易船との交易によっても、仲介者として巨利を得た。ベーリング海域のチュクチやシベリア・エスキモー、イスピアック・エスキモーの中には、ヨーロッパ人や他の先住民との毛皮交易を通して莫大な富を築く者が出現した(Bockstoce 1995: 195)。例えば、交易の仲介者としてシベリア側のインディアン・ポイントに住むある先住民は全長約18メートルのスクナー船を購入したほどであった(Bockstoce 1995: 197-198)。アラスカ側のポント・ホープにも交易の仲介によって富豪となったイスピアックがいた(Bockstoce 1995: 199)。また、ベーリング海域における交易活動の進展にともない、エスキモー語、チュクチ語、英語、ロシア語、ハワイ語などをもとにした交易語が形成され、使用されていた(Reuse 1994: 319-329)。

もともとシベリア・エスキモーはバーター交易を内陸部のトナカイ・チュクチやアラ

スカのエスキモーと行なってきた下地があった。何人かのシベリア・エスキモーはバーター交易の経験をいかして交易者として成功し、経済的な富裕層を形成したという (Menovshchikov 1964: 844)。シベリア・エスキモーの間で経済的な階層化が顕著になったのは、欧米人との交易が本格化し、海獣狩猟が商業的な価値をもつようになってからのことであった (Menovshchikov 1964: 843; Hughes 1984: 255)。19世紀後半から20世紀の初頭には14人のエスキモーが彼らの店を構え、小型捕鯨船、動力エンジン、捕鯨銃、弾薬その他の商品を商っていたという (Hughes 1964: 9; Menovshchikov 1964: 843-845)。社会内ではクジラのヒゲの半分はクジラをしとめたハンターに、残りは狩猟に参加したハンターに分配されるなど変化がみられた。また、捕鯨のためのウミアックや大型ボートを所有しているハンターとそうでないハンターの間に経済格差がはじめ、後者は労働者として前者に依存するようになった。このためウミアックや木製捕鯨ボートの所有者、それから交易の仲介者 (middleman) がそれ以前にもまして経済力と政治力を持ち始めた。

1880年代のはじめまでに、新旧両大陸のベーリング海峡地域の先住民は、火器、弾薬、木工道具、針、衣類、ナイフなどを提供してくれる捕鯨船や交易船の供給に依存するようになった。しかし、シベリア・エスキモーのこの仲介交易者としての活動は、1880年代にクジラが激減し、1890年代にセイウチが減少するにつれて、先住民側の交易品量が激減したために、衰退していった (Foote 1964: 19)。さらに先住民がロシア人やアメリカ人捕鯨者、その他の商人と接触する頻度が高くなった1820年頃以降、特に1880年代以降はベーリング海峡地域では伝染病の流行によって先住民の人口が激減した。19世紀の後半には資源減少のためにエスキモーによる捕鯨やセイウチ猟は衰退し、しばしば飢餓にみまわれることがあった⁵⁾。ベーリング海峡の先住民に富をもたらしたクジラのヒゲやセイウチの牙、毛皮の欧米人との交易は、一方では伝染病の流行やそれら資源の枯渇化を先住民社会にもたらしたのである。そして彼らは19世紀末からは徐々にキツネやホッキョクキツネの個人毘猟や小型海獣狩猟に生業の中心を置くようになった (Hughes 1964: 5)。彼らは活発な交易者や大型海獣狩猟民というよりも経済的な安定性を欠いた狩猟・漁撈民となったのである。

以上概観してきたように、19世紀の終わりから20世紀前半にかけてみられたシベリア・エスキモーのクラン制度の衰退は、先住民交易やロシア人・アメリカ人らとの交易の盛衰との間に因果的な対応関係があると推定しうる。

5 結論

本論文では、次のような仮説の提起を試みる。

- (1) シベリア・エスキモーは、ロシア人やアメリカ人と接触する以前から、シベリア側とアラスカ側との交易の仲介者として活躍し、富を蓄積していた。さらに、クジラやセイウ

チが多数生息していたために、経済的に安定していた。

(2) 1789年におけるアニユイ交易の開始、1820年代以降の捕鯨船や小型商船との取引によって交易仲介者としての役割が高かった。

(3) (1) と (2) の経済条件が、社会内の階層化やクラン制度の存続を生み出した。

(4) 19世紀末以降、アメリカ人捕鯨者によるクジラとセイウチ資源の乱獲により、シベリア・エスキモーは交易品であるクジラのヒゲ、セイウチの牙を入手できなくなるとともに、食料となるクジラの皮部と肉、脂肪、セイウチの肉と脂肪を入手することが困難になった。このような状況からシベリア・エスキモーは、従来の交易活動や狩猟活動が難しくなり、ホッキョクキツネの毛皮の交易や小型海獣の狩猟に依存せざるを得なくなった。すなわち経済活動がウミアック（大型皮製舟）や木製捕鯨ボートを利用した集団狩猟や交易活動から個人猟や小規模な交易活動に変化していった。さらに欧米人との接触によって持ち込まれた伝染病によって19世紀末にはこの地域の先住民人口が激減した。これらのあらたな状況への適応のために、父系クランからより小型で柔軟な社会組織へと変貌を遂げた。

(5) ベーリング海峡地域に住むシベリア・エスキモーは、現在は狩猟・漁撈民であるが、18、19世紀には活発な交易者であり、かつ大型海獣狩猟民でもあった。

この仮説に基づけば、なぜベーリング海峡のシベリア・エスキモーがクラン組織を持っていたのに、先住民捕鯨に従事していたイヌピアック・エスキモーにはクラン組織を持っていなかったのかを説明することができる。両者の間の決定的な違いは、先住民間や欧米人との交易への係わり方の違いであった。

筆者の仮説が正しければ、交易活動の展開（隆盛や衰退）とセトルメント・パターンには相関関係が見られるはずである。この仮説は、チュコトカ半島の沿岸部やセント・ローレンス島、キング島、ダイオミード島においていつ頃からどのようなセトルメント・パターンの変化が起こったかを考古学的に調査することによって、検証することができよう。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、谷本一之先生、田島佳也先生、Aron Crowell 先生、Molly Lee 先生、James Savelle 先生、佐々木史郎先生からご批判やコメントを頂戴した。記して感謝の微意を表す次第である。

註

- 1) シベリア・エスキモーの社会組織に関する研究はほとんど行われていないが、セント・ローレンス島のユピック・エスキモーについては Bogojavlensky (1969) や Ross (1958) が存在している。前者はハーバード大学に提出された博士論文であり、後者はスタンフォード大学に提出された修士論文であるため、公刊されていない。本来ならば、両者のデータを本論において検討すべきであったが、入手することができなかった。これらの検討は今後の課題としておきたい。

- 2) シベリア・エスキモーと内陸チュクチとの間の交易関係については、Krupnik (1993: 40) を参照されたい。
- 3) 1820年頃から小型スクーター船がシアトル、サンフランシスコ、ハワイ、香港からクジラのヒゲ、セイウチの牙や海獣の毛皮を求めてベーリング海域に出現し始めた (Foote 1964: 19)。
- 4) シベリア・エスキモーの交易事例については Krupnik (1993: 57) を参照されたい。
- 5) シベリア・エスキモーにとって、クジラやセイウチは重要な食料および交易資源であった。クジラとセイウチの油は燃料や交易品であった。クジラの皮部と骨、ヒゲは内陸部の人々との交易品であった。肉は食料となった。クジラのヒゲやセイウチの牙はアメリカ人やロシア人らとの交易品であった。

文 献

Bockstoce, John R.

1995 *Whales, Ice and Men: The History of Whaling in the Western Arctic*. Seattle and London: University of Washington Press.

Bogoras, W.

1904-09 *The Chukchee*, Memories of the American Museum of Natural History XI and The Jesup North Pacific Expedition 7. New York: G. E. Stechert and Leiden: Brill.

Bogojavlensky, Sergei

1969 *Imaangmiut Eskimo Careers: Skinboats in Bering Strait*. Ph.D. Dissertation, Harvard University.

Burch, Jr., Ernest S.

1970 *The Eskimo Trading Partnership in North Alaska: A Study in Balanced Reciprocity*. *Anthropological Papers of the University of Alaska*. 15(1), 49-80.

1988 *War and Trade*. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds.) *Crossroads of Continents: Culture of Siberia and Alaska*, pp.227-240. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

Feinberg, L.

1967 *On the Question of the Eskimo Kinship System*. *Arctic Anthropology* 9(1), 244-256.

Foote, D. C.

1964 *American Whalers in Northwest Arctic Alaska*. *Arctic Anthropology* 2(2), 16-20.

フォーシス, J.

1998 『シベリア先住民の歴史』 森本和男訳, 東京: 彩流社 (Forsyth, J., 1972, *A History of the Peoples of Siberia: Russia's North Asian Colony 1581-1990*. Cambridge: Cambridge University Press)。

Heinrich, Albert C.

1963 *Eskimo Type Kinship and Eskimo Kinship: An Evaluation and a Provisional Model for Presenting Data Pertaining to Inupiaq Kinship Systems*. Ph.D. Thesis, Seattle: University of Washington, Department of Anthropology.

Hickey, C.

1979 *The Historic Beringian Trade Network: Its Nature and Origins*. In A. P. McCartney (ed.) *Thule Eskimo Culture: An Anthropological Retrospective*. National Museum of

- Man, Mercury Series, Archaeological Survey of Canada 88, pp.411-435. Ottawa: National Museums of Canada.
- Hughes, Charles C.
- 1958 An Eskimo Deviant from the "Eskimo" Type of Social Organization. *American Anthropologist* 60(6), 1140-1147.
- 1964 "The Eskimos" from the Peoples of Siberia. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 12(1), 1-13.
- 1984a Asiatic Eskimo: Introduction. In D. Damas (ed.) *Arctic. Handbook of North American Indians* 5, pp.243-246. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- 1984b Siberian Eskimos. In D. Damas (ed.) *Arctic. Handbook of North American Indians* 5, pp.247-261. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- 1984c Saint Lawrence Island Eskimo. In D. Damas (ed.) *Arctic. Handbook of North American Indians* 5, pp.262-277. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Kingston, Deanna M.
- 2000 Siberian Songs and Siberian Kin: Indirect Assertions of King Islander Dominance in the Bering Strait Region. *Arctic Anthropology* 37(2), 38-51.
- 岸上伸啓
- 2001 「北米北方地域における諸資源の交易について—毛皮交易とその諸影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25(3), 293-354。
- Krupnik, Igor
- 1993 *Arctic Adaptations: Native Whalers and Reindeer Herders of Northern Eurasia*. Translated by Marcia Levenson. Hanover and London: University Press of New England.
- Menovshchikov, G. H.
- 1964 The Eskimos. In M. G. Levin and L. P. Potapov (eds.) *The Peoples of Siberia*, pp.836-850. Chicago: The University of Chicago Press.
- Michael, H. N. (ed.)
- 1967 *Lieutenant Zagoskin's Travels in Russian America 1842-1844: The First Ethnographic and Geographic Investigations in the Yukon and Kuskokwim Valleys of Alaska*. Anthropology of the North: Translations from Russian Sources 7. Toronto: University of Toronto Press.
- Murdock, G. P.
- 1949 *Social Structure*. New York: Macmillan Company.
- マードック, G. P.
- 1978 『社会構造』内藤莞爾監修訳, 東京: 新泉社。
- Oswalt, Wendell H.
- 1967 *Alaskan Eskimos*. Scranton, Pennsylvania: Chandler Publishing Company.
- Pierce, R. A. (ed.)
- 1979 *Russian America: Statistical and Ethnographic Information*. Materials for the Study of Alaskan History 15, by Rear Admiral Ferdinand Petrovich Wrangell with Additional Material by Karl-Ernst-Baer. Kingston, Ont.: The Limestone Press.
- Ray, Dorothy Jean
- 1983 *Ethnohistory in the Arctic: The Bering Strait Eskimo*. Kingston, Ont.: The Limestone Press.

- 1984 Bering Strait Eskimo. In D. Damas (ed.) *Arctic. Handbook of North American Indians* 5, pp.285-302. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- 1992 (1975) *The Eskimos of Bering Strait, 1650-1898*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Rouse, Willem, J. de.
- 1993 *Siberian Yupik Eskimo: The Language and Its Contact with Chukchi*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- Ross, Frances, A.
- 1958 The Eskimo Community House. M.A. Thesis, Stanford University.
- Rubel, Arthur J.
1961. Partnership and Wife-Exchange among the Eskimo and Aleut of Northern North America. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 10(1), 59-72.
- 佐々木史郎
- 1999 「トナカイ多頭飼育の生産性」松原正毅・小長谷有紀・佐々木史郎（編）『ユーラシア遊牧社会の歴史と現在』（国立民族学博物館研究報告別冊20）pp.517-540，大阪：国立民族学博物館。
- Schweitzer, P. P. and E. Golovko (with a contribution by L. D. Kaplan)
- 1995 *Contacts across Bering Strait 1898-1948*. Report Prepared for the U.S. National Park Service. Anchorage: Alaska Regional Office.
- Spencer, Robert F.
- 1976 (1959) *The North Alaskan Eskimo: A Study in Ecology and Society*. New York: Dover Publications, Inc.
- Wixman, R.
- 1983 *The Peoples of the USSR: An Ethnographic Handbook*. Armonk, New York: M. E. Sharpe.
- VanStone, J. W.
- 1979 *Inglik Contact Ecology: An Ethnohistory of the Lower-Middle Yukon 1780-1935*. Fieldiana Anthropology 71. Chicago: Museum of National History.